

障害を初発し、S 60 年 4 月大学入学後まもなく離人症様症状、視覚異常感、奇妙な身体感覚出現し、6 月より魔物にとりつかれたという憑依妄想に発展した。7 月 2 日当科入院後は、予期不安、身体病恐怖、精神病恐怖、心気症状が訴えられた。8 月上旬には死の予感にとりつかれ抑うつになった。8 月 20 日退院としたが、心気症状、精神病恐怖が持続し、さらに視覚異常感、離人症様症状が再燃している。

症例は、心気、恐怖強迫、離人、不安などのいわゆる汎神経症症状を呈し、一過性の憑依妄想を有しているが、基本的には疾病恐怖が前景に立つ神経症レベルの病態と思われる。

さて不一致の理由をさぐる上で双子の性格分析を行ったが、B は A と比べ神経質傾向、几帳面さ、完全主義的傾向、強迫的傾向、心氣的傾向といった神経症的性格の病理が強く見られた。この性格の違いをきたした要因として 2 才までの母子分離が重要と考えられた。B は自由な自我の発達ができず、神経症的性格の病理を発達させたものと思われた。

発症機転としては、他県への大学進学により不安定ながら依存関係にあった母との別離が重要と考えられた。

以上多彩な神経症様症状を呈した一卵性双生児の不一致例を報告し、症例の診断および双子の性格分析、発症機転について考察した。

3) 二人組精神病の一症例

稲井 徳栄・勝井 丈美 (河渡病院)
和泉 貞次

60 才の母親 (M) と 30 才の娘 (C) に生じた二人組精神病の一症例について報告した。

家族歴: (M) の母親に被害妄想的言辭がみられたことがあった。

現病歴: S 49 年建売り住宅を購入し、(M) が敷地内の草取りをしていたところ隣家の開業医 T に、「工事の時に俺の家の前を通さない」などと嫌味を言われ、近所付き合いに神経を使うようにしていた。S 50 年 10 月転居。その頃より結婚していた (C) が実家に戻り絶えず行動を共にするようになった。まもなく (M) が「敷地内に灯油をまかれた」「家のブロックがこわされた」「車庫をこわされた」「私を近所の人が刃物を持って襲う」などと言い始め、(C) も同調するようになった。警察へ通報したり、裁判に訴えたこともあった。最近 (M) が、「近所の家に放火する」と言い始めたため、S 60 年 5 月 24 日二人共入院となった。

入院後の経過: 精神療法、薬物療法 (メジャーランキライザー) を併用した。行動を共にしていることが多く治療の必要性から別の病棟に分けようとしたところ、二人共自殺企図を試みた。自分達が後から引越してきたのだから頭を下げるべきだ、とは言うものの被害妄想については変化がみられなかった。

(M) が IQ 63, (C) が IQ 50 であり、ロールシャッハテストでは (M) に興味対象の狭さ、観念活動の貧弱さが、(C) に精神活動の貧弱性、常同的思考、依存欲求・愛情欲求著明が認められた。

本症例は、知能の低い母と娘が極めて密着した生活を送っているうちに、被害妄想・好訴妄想を抱いた母親が娘を感化し、二人共同様な症状を呈した極めて貴重な症例であると考えられる。なお、母親については、“パライノイア” という病名が妥当と考えられる。

4) 複雑部分発作による遷延性意識障害をきたした、シンナー吸引歴をもつ一例

恩田 晃・笹川 陸男 (国立療養所 寺泊病院)
梶 鎮夫

症例は 16 才の少年で、軽い感冒様症状があった以外は特に誘因なく、突然の意識減損を伴う偏向発作で発症した。発作は一日数回おこり、発作間欠期にも軽い意識障害が続いた。この状態が数日間続き、当院に入院。脳波では広汎に 2~2.5Hz 不規則徐波が連続してみられ、VTR-脳波同時記録にて発作が確認された。発作時には、広汎性 2.5~3Hz 高振幅徐波が律動性に連続していた。諸検査にて脳炎や代謝性疾患を疑わせる所見は認められず、薬物の影響も確認されなかった。頭部 CT も正常であった。重患室にて経過観察し、PHT 投与を行なった。入院第 3 日目には意識清明となり、発作も減少。脳波も徐々に改善がみられ、3 週間後には 9Hz の基礎律動が認められている。

シンナーは、13 才から 2 年半にわたる週 1 回以上の吸引歴があるが、今回の発症とは直接の関係はないと思われる。

5) 晩発性精神分裂病を疑われた Klinefelter 症候群の一例

早川 東作 (東京大学分院神経科)
浅香 昭雄 (同 保健学科)
田宮 崇 (田宮病院)
鈴木 正博 (日赤病院神経内科)

晩発性分裂病を疑われた Klinefelter 症候群の 1 例